



初代水沼橋流出後に活躍した「岡田式渡船」 馬車を2、3台は積むことができる大型の渡し船であった 金山町・水沼 1913～1925年頃

かねやま「村の肖像」プロジェクトより

水辺の記憶とダムとの記録

水辺の記憶

金山町は、只見川とその支流が巡り、カルデラ湖の沼沢湖を頂く水辺の町である。水のありかたは、町の暮らしをかたちづくるひとつの基礎であった。川は、村と村を隔てつつ繋ぐ交通路であり、鮭が遡上し、川魚が多く暮らす資源の宝庫であった。寛文年間より鯉や鮒の放流が続けられてきた沼沢湖では、大正期には大規模な淡水魚の養殖が始まり、昭和初期には冷たく澄んだ水を好むヒメマスがこの地の特産となった。こうした水辺の姿は、只見川流域の電源ダム開発によって、戦後大きく変わってゆく。



ダムに沈んだ下井草集落での日中戦争戦没者の村葬 金山町・大志 1938年 / 荷物運搬に使役された舟場の馬 金山町・水沼 1943年以前 [推定] / 沼沢湖のヒメマス地引網漁 金山町・沼沢 1932年



上田発電所 嶽の山中腹より工事場を望む 金山町・上田 1953年 / 上田発電所工事現場 金山町・上田 1952年～1954年 / 上田発電所工事現場 金山町・上田 1952年～1954年

ダムとの記録

東北電力上田発電所

豪雪がもたらす豊富な水量と急激な高低差を有する只見川は、明治期より水力発電の好適地として注目されてきた。そして戦後、金山町内には相次いで電源ダムが建設されることとなる。ダム建設は町に様々な仕事や只見線をはじめとした新たなインフラをもたらし、高度成長期の都市部で必要とされた多くの電力を供給した一方で、ひとびとが日々険しい土地に切り開いてきた農地や宅地を奪い、生活を否応無しに変えていった。さらには、只見川の清流を押しとどめ、治水上の新たな課題を生み出した。写真は1952年9月着工、1954年3月より発電を開始した最大出力63,900キロワットの水力発電所、東北電力上田発電所の工事風景。



只見川上田発電所での仮排水路閉塞完了と湛水開始 この後、上流の中川・宮崎集落では、水没した田畑の代わりに上野原開拓に乗り出すこととなった 金山町・上田 1954年2月4日午前10時